

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和5年6月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万5977トン、前年同月比100.5%、価格は1キログラム当たり266円、同99.8%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万7024トン、前年同月比104.0%、価格は1キログラム当たり235円、同98.3%となった。
- 8月は、果菜類を中心に作付けの減少は報告されるものの、前進気味で平年を上回る出荷が予想される。11月初め頃まで西日本の市場からの引き合いが強まると予想され、全国的に市場価格は堅調と予想される。

(1) 気象概況

上旬は、北日本では天気は数日の周期で変化したが、低気圧の影響でまとまった雨の降った日があったため、旬降水量は、北日本日本海側と北日本太平洋側でかなり多かった。旬間日照時間は、北日本日本海側で少なく、北日本太平洋側では平年並だった。東・西日本では、梅雨前線の影響を受けやすく曇りや雨の日が多かったため、旬間日照時間は、西日本日本海側と東・西日本太平洋側で少なく、東日本日本海側では平年並だった。また、関東甲信地方では、8日ごろに梅雨入りしたとみられる。前線に向かって台風第2号から暖かく湿った空気が流れ込んだ影響で、太平洋側では線状降水帯が発生し、2日から3日にかけて記録的な大雨となった所もあったため、旬降水量は、東・西日本日本海側と東・西日本太平洋側でかなり多かった。特に、東日本太平洋側では旬降水量の平年比が600%となり、1946年の統計開始以降、6月上旬として1位の多雨となった。気温は、北・東日本では暖かい空気が流れ込みやすく、平年を上回る日が多かったため、旬平均気温は高かった。一方、西日本と沖縄・奄美では平年並だった。

中旬は、旬の前半では北日本で気圧の谷の影響を受けやすく、東・西日本は梅雨前線や湿

た空気の影響を受けやすかったため、曇りや雨の日が多かった。旬の後半は高気圧に覆われやすく、この時期としては晴れた日が多かった。このため、旬間日照時間は、北・西日本日本海側と北・東日本太平洋側で多く、東日本日本海側と西日本太平洋側では平年並だった。旬降水量は、北・西日本日本海側と東・西日本太平洋側で少なく、東日本日本海側と北日本太平洋側では平年並だった。なお、北陸地方、東北南部、東北北部では11日ごろに梅雨入りしたとみられる。旬平均気温は、北日本を中心に暖かい空気に覆われ平年を上回る日が多かったため、北日本でかなり高く、東・西日本で高かった。特に、北日本の旬平均気温の平年差は+2.2℃となり、1946年の統計開始以降、6月中旬として1位タイの高温となった。

下旬は、旬の前半は高気圧に覆われて晴れた日もあったが、旬の後半は北日本では気圧の谷の影響を受けやすく、東・西日本は梅雨前線や湿った空気の影響を受けやすかったため、日本海側を中心に曇りや雨の日が多く、30日は西日本で大雨となった所もあった。そのため、旬降水量は、北・東・西日本日本海側で多く、旬間日照時間は、西日本日本海側で少なかった。北・東日本と西日本太平洋側では平年並みだった。一方、東・西日本太平洋側では、まとまった降水とならなかった所が多く、旬降水量は少

なかった。北日本太平洋側では平年並だった。沖縄地方では25日ごろに、奄美地方では26日ごろに梅雨明けしたとみられる。気温は、北日本を中心に暖かい空気に覆われやすかったた

め、旬平均気温は、北日本でかなり高く、東・西日本で高かった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図1）。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本					日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		
東日本					日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	
西日本						日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側

資料：気象庁「6月の天候」

1 平年を上回る水準
 2 平年並み
 3 平年を下回る水準

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は11万5977トン、前年同月比100.5%、価格は1キログラム当たり266円、同99.8%となった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（6月速報）

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	115,977	100.5	94.7	266	99.8	105.2	252	266	284
だいこん	6,855	100.8	99.8	92	88.2	92.9	80	95	105
にんじん	6,255	112.8	100.3	140	90.5	104.5	138	139	143
はくさい	6,195	101.8	93.8	65	92.7	95.4	63	63	69
キャベツ類	14,269	85.4	87.4	95	112.8	113.7	79	96	113
ほうれんそう	1,305	99.3	99.5	491	104.6	106.0	398	493	636
ねぎ	3,623	104.4	97.8	437	101.0	111.9	441	455	418
レタス類	8,256	110.0	101.8	137	89.7	103.3	158	123	132
きゅうり	6,720	97.3	92.8	286	130.2	108.9	228	292	347
なす	3,036	94.0	92.4	383	110.5	98.5	353	402	399
トマト	7,386	101.9	92.9	294	88.1	103.9	272	299	318
ピーマン	2,506	106.9	105.1	436	102.4	100.9	369	446	519
さといも	90	70.7	54.3	664	131.3	145.2	614	656	753
ばれいしょ	7,117	95.8	91.1	153	126.3	101.8	154	150	156
たまねぎ	9,596	113.2	94.1	96	45.8	90.2	93	94	104

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんの価格が、千葉産が終了した中旬以降上がったものの、高めに推移した前年を1割以上下回り、平年をかなりの程度下回った(図2)。

葉茎菜類は、キャベツの価格が中旬以降底上げとなり、前年、平年とも1割以上上回った(図3)。

果菜類は、きゅうりの価格が、西南暖地、関

東産の終盤となった下旬に向けて上がり、大幅な安値で推移した前年を3割強上回り、平年をかなりの程度上回った(図4)。

土物類は、ばれいしょの価格が、5月までの高値の反動があったものの、大幅な安値で推移した前年を2割以上上回り、平年をわずかに上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2のとおり。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

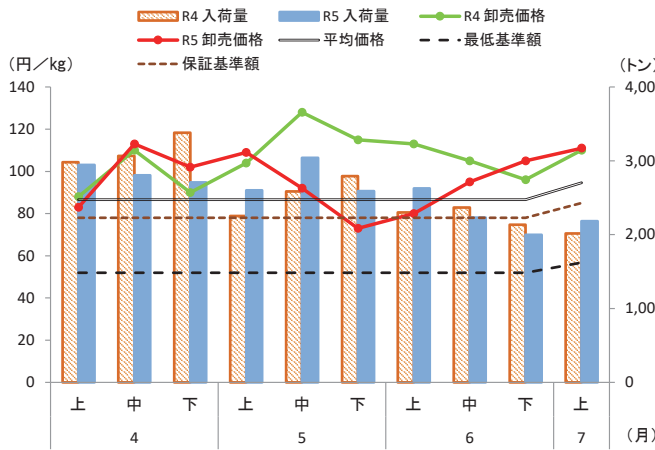


図3 キャベツの入荷量と卸売価格の推移

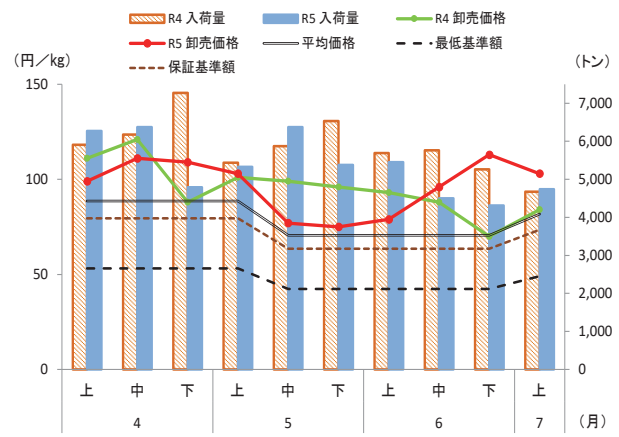


図4 きゅうりの入荷量と卸売価格の推移

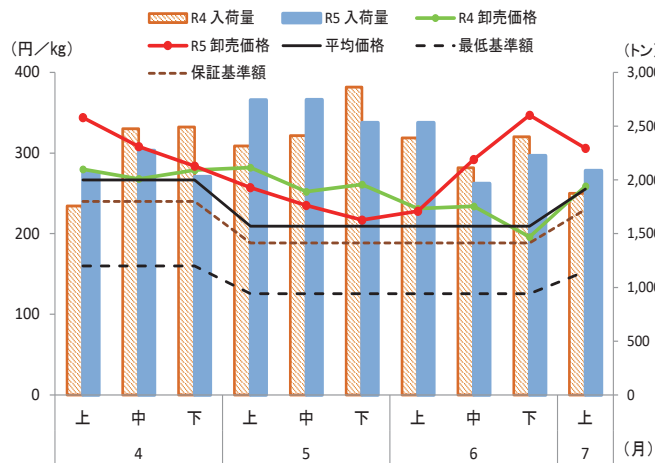
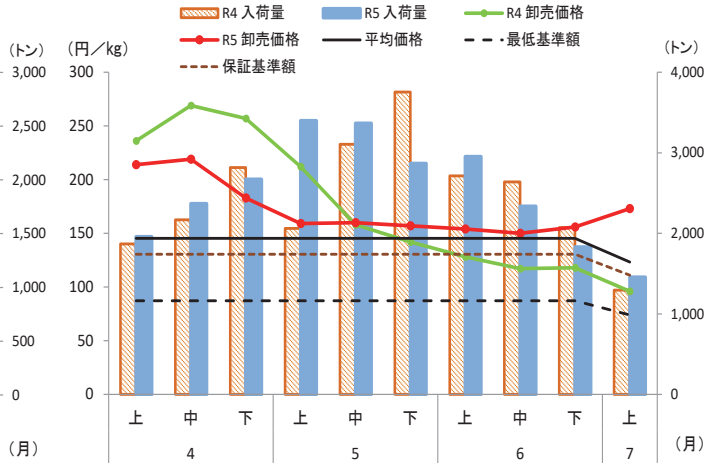


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。

※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	6月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>青森産を中心に千葉産、北海道産の入荷があった。青森産の作付面積は前年並みで、病虫害も少なく生育は順調であった。千葉産の作付面積は前年並みで、中旬まで出荷はほぼ終了した。北海道産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育は順調で、やや前進傾向となった。総入荷量は前年をわずかに上回り、平年並みとなった。</p> <p>価格は、千葉産が終了した中旬以降上がったものの、高めに推移した前年を1割以上下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	にんじん 	<p>千葉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、低温・乾燥による一部播種の遅れから、その後の気温の上昇により生育は平年並みからやや前進傾向となった。後続の青森産、北海道産についても病虫害もみられず順調であった。総入荷量は少なめに推移した前年を1割以上上回り、平年並みとなった。</p> <p>価格は月間を通して動きは安定し、高めに推移した前年を1割弱下回り、平年をやや上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、一部で4月の気温低下により生育遅延がみられた。総入荷量は少なかった前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>加工需要の低迷や、気温が高く推移したことにより量販店などの売り場の縮小が早かったことなどから、価格は月間を通して大きな動きは出ず、前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p>
	キャベツ類 	<p>千葉産、茨城産を中心に群馬産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、気温の上昇と適度な降雨によりやや前進しており順調である。茨城産の作付面積は前年並みで、気温が高めに推移したことにより前進傾向となった。群馬産の作付面積は前年並みで、5月上旬の降霜により生育の停滞がみられたものの、適度な降雨に恵まれ順調。総入荷量は千葉産の早めの減少により、前年、平年とも1割以上下回った。</p> <p>価格は中旬以降底上げとなり、前年、平年とも1割以上上回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>群馬産、茨城産、栃木産中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年をやや下回る。産地は高冷地中心で、一部べと病の発生が散見されるが、高めの気温推移と適度な降雨から前進傾向で順調である。茨城産の作付面積は前年並みで、6月初頭の降雨により一部冠水被害が見られ、収穫遅れや品質低下がみられた。栃木産の作付面積は前年並みで、高冷地を中心に生育は順調であった。総入荷量は前年、平年ともわずかに下回った。</p> <p>降雨の影響による中旬以降の出荷の減少と産地間の品質格差が顕著となり、価格は下旬に高騰した。前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	ねぎ 	<p>茨城産を中心に千葉産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、高温と適度な降雨により生育は順調で前進した。一部圃場で病虫害が散見されている。千葉産の作付面積は前年並みで、3月以降の気温の上昇により生育は前進傾向となった。一部病害は散見されるが軽微である。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、降雨が多く入荷が不安定であった影響もあり、高めに推移した前年をわずかに上回り、平年を1割以上上回った。</p>
	レタス類 	<p>長野産を中心に群馬産の入荷があった。長野産の作付面積は前年並みで、気温が高く適度な降雨もあったため生育は順調。群馬産の作付面積は前年をやや下回り、天候に恵まれ生育は前進。総入荷量は少なめに推移した前年を1割上回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>長野産の増量に伴い価格は中旬以降下がり、高めに推移した前年を1割強下回り、平年をやや上回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>埼玉産、群馬産を中心に福島産など後続の東北産の入荷があった。埼玉産の作付面積は前年並みで、好天に恵まれ生育は良好。群馬産の作付面積は前年並みで、一部病害が散見されたものの生育は順調で、出荷の終盤となった。福島産などの東北産の作付面積は前年並みで、一部5月の寒暖差の拡大による樹勢の低下が散見されたが、生育はおおむね順調。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は西南暖地、関東産の終盤となった下旬に向けて上がり、大幅な安値で推移した前年を3割強上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	なす 	<p>高知産を中心に群馬産など関東産の入荷があった。高知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も病害の発生が平年よりやや多い。関東産の作付けは前年並みで、栃木産のみやや下回る。3~4月の低温・干ばつにより一部生育に遅延がみられる産地もあるが、おおむね順調。一部病害が散見される。総入荷量は高知産が前年を下回っていることにより、前年、平年ともかなりの程度下回った。</p> <p>価格は安かった前年を1割強上回り、平年をわずかに下回った。</p>
	トマト 	<p>栃木産、熊本産を中心に愛知産、千葉産などの入荷があった。栃木産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調で収穫は終盤となった。コナジラミ類の発生が平年より多く病害も散見された。熊本産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調で終盤となった。黄化葉巻病、黄化病の発生が散見された。愛知産の作付面積は前年並みで、病害が散見されるも生育はおおむね順調。千葉産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調。総入荷量は少なめに推移した前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は下旬に向けて回復傾向となり、高めに推移した前年を1割以上下回り、平年をやや上回った。</p>
	ピーマン 	<p>茨城産中心の入荷となった。作付けは前年並みで生育は順調も、燃油高騰と病害により春作への転換が進んでいる。総入荷量は前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は下旬に向けて上がり、前年、平年ともわずかに上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>鹿児島産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、雨の影響が大きかった前年の出荷を上回り順調であった。中国産の輸入はほとんど入荷がない。総入荷量は少なかった前年を3割弱下回り、平年を5割近く下回った。</p> <p>価格は高めに推移した前年を3割以上上回り、平年を4割以上上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>長崎産を中心に静岡産などの入荷があった。長崎産の作付面積は前年並みで、好天に恵まれ生育は順調で、大玉中心だが一部圃場で降雨による病害や傷みが散見された。やや前進傾向であった。静岡産の作付面積は前年並みで、掘り取りの遅延が散見されたが、適度な降雨と好天に恵まれ生育は順調であった。総入荷量は鹿児島産、北海道産の減少が早く、少なかった前年をやや下回り、平年を1割近く下回った。</p> <p>価格は5月までの高値の反動があったものの、大幅な安値で推移した前年を2割以上上回り、平年をわずかに上回った。</p>
	たまねぎ 	<p>佐賀産を中心に兵庫産などの入荷があった。佐賀の作付面積は前年並みで収穫はほぼ終了し大玉傾向であった。玉のそろいも良く順調だが、べと病が一部散見された。兵庫産の作付面積は前年並みで、適度な降雨と気温の上昇により1週間程度前進傾向となった。一部病害が散見されるが、大きな影響はない。中国産の輸入は前年の5割以下となっている。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は大幅な高値で推移した前年を5割以上下回り、平年を1割弱下回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万7024トン、前年同月比

104.0%、価格は1キログラム当たり235円、同98.3%となった(表3)。品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(6月速報)



品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	37,024	104.0	98.5	235	98.3	104.5	227	230	249
だいこん	2,079	99.4	86.9	100	89.3	97.4	97	101	104
にんじん	2,505	92.2	94.1	125	102.5	112.7	124	125	124
はくさい	3,269	103.8	106.3	75	96.2	96.9	82	71	70
キャベツ類	4,271	103.2	98.3	104	118.2	114.7	79	108	132
ほうれんそう	448	102.5	91.2	607	104.3	104.9	546	609	704
ねぎ	596	121.9	108.8	505	99.6	109.4	504	509	501
レタス類	2,072	108.5	87.2	140	86.4	107.4	160	127	136
きゅうり	1,652	97.8	101.3	280	135.3	114.1	221	302	321
なす	1,177	95.5	105.9	349	110.4	103.7	334	354	357
トマト	2,066	98.8	103.6	303	91.0	103.8	281	309	330
ピーマン	593	100.6	101.5	409	124.7	113.9	326	424	521
さといも	18	80.6	54.1	683	112.0	137.2	736	628	710
ばれいしょ	2,625	93.2	89.7	136	132.0	97.2	131	133	148
たまねぎ	4,535	128.5	109.9	96	46.2	86.2	92	93	103

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」






注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	6月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>青森産と北海道産が主体となる入荷に、岐阜産や和歌山産の入荷もあった。2Lや3Lサイズの太物が多く、青森産は順調な入荷で中旬以降に増加し、月間では前年を大幅に上回った。北海道産は旬を追うごとに入荷減少し、月間では前年をかなり下回った。中旬以降にスタートした岐阜産は出遅れ感があり入荷量は少なく、和歌山産は終盤で旬を追うごとに入荷減少した中でも入荷量自体は多く、月間では前年を大幅に上回った。月間全体では前年をわずかに下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>価格は太物が多いことから伸び悩んで全旬とも前年より安値となり、月間でも前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。</p>
	にんじん 	<p>長崎産と和歌山産が主体となり、兵庫産や下旬からは北海道産の入荷も始まった。長崎産は終盤に向かいつつも順調な入荷が続き、和歌山産は上旬が少なく中旬以降に増加するも伸び悩み、月間では前年をかなり下回った。兵庫産は順調な中でも終盤に向かったため旬を追うごとに入荷減少し、北海道産は前進気味で順調なスタートとなった。全体としては旬を追うごとに入荷増傾向であったが、月間では前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p> <p>販売は順調で全旬とも安定した価格での推移となった。月間では前年をわずかに上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>

葉茎菜類 	はくさい	<p>長野産を中心に茨城産の残量入荷などがあった。長野産は上中旬に適度な降雨があったため気温も高かったことから生育が進んで前進出荷傾向となり、中旬に入荷増となった。下旬には落ち着いたが月間では前年を上回った。茨城産は上旬こそ順調な入荷だったが、中旬に切り上がり、他産地も切り上がり早く下旬には端境が生じたことで全体では入荷減量となった。月間全体では前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は中旬に入荷増となったことで下落し、下旬で入荷減少したが気温高から量販店での動きが鈍く、横ばいとなった。加工筋からの引き合いはあったが全体としては伸び悩む結果となった。月間では前年、平年ともやや下回った。</p>
	キャベツ類	<p>茨城産が中心となり、愛知産の残量入荷や後続の長野産、群馬産の入荷も始まった。茨城産は入荷量が多く、終盤に向かい旬を追うごとに減少したが、月間では前年をかなり上回った。愛知産も旬を追うごとに減少した。長野産は中旬から、群馬産は下旬から本格的に入荷が増加し、月間では前年を大きく上回った。月間全体では前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は愛知産の減少が早く月の前半に品薄感が生じたことで中旬に高騰し、後続産地のスタートと共に下旬にはさらに上伸した。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
	ほうれんそう	<p>岐阜産を中心とする入荷であった。福岡産など前段の産地が終盤となって端境期に入り、岐阜産は梅雨に入って曇天が多かったことにより生育が進まず、入荷量は伸び悩んで旬を追うごとに減少した。月間全体では前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は不足感から旬を追うごとに上伸して高値推移となった。月間では前年、平年ともやや上回った。</p>
	ねぎ (白ねぎ)	<p>茨城産と鳥取産が主体となる入荷であった。茨城産は生育良く順調な出荷を続け、上中旬は前年をかなり上回り、下旬にはさらに増加して前年を大きく上回った。月間でも前年を大幅に上回った。鳥取産も順調な入荷が続き、月間では前年を大幅に上回った。全体でも前年を大幅に上回った。</p> <p>価格は入荷量が多いことと需要期を外れていることにより安値推移となった。月間全体では前年をやや下回った。</p>
	ねぎ (青ねぎ)	<p>徳島産を中心に高知産も主体となり、愛媛産や奈良産などの入荷もあった。各産地とも梅雨入り後に曇天や雨の日が多く生育が進まなかったことにより、旬を追うごとに減少傾向が続いた。月間全体では前年を下回った。</p> <p>絶対量不足から価格は高値推移となり、旬を追うごとに上伸した。月間では前年をかなり上回った。</p>
	レタス類	<p>主力の長野産の入荷となった。生育順調で産地出荷量も多く、中旬以降には更に増加した。サニーレタス、リーフレタスも長野産を中心とする入荷であった。レタス同様に生育順調で産地出荷量も多く、中旬以降に増加した。レタス類全体では月間で前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>レタス、サニーレタス、リーフレタスともに入荷増に伴って中旬以降に価格が落ち込み、安値のまま推移した。月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
果菜類 	きゅうり	<p>宮崎産を中心として夏秋産地の福島産も主体となり、高知産、徳島産などの入荷もあった。宮崎産の冬春物は終盤に向かう中で旬を追うごとに減少した。福島産は作の初期の気温が低かったことと、梅雨に入って曇天が続いたことにより、出遅れ気味で入荷量は伸び悩んだ。他産地も早い梅雨入りの影響もあり入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年をわずかに下回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>上旬の品薄感から主力産地が終盤に向かう中で価格が上伸し、後続産地の出遅れにより旬を追うごとに高騰した。量販店での特売需要もあり引き合いは強く、月間では前年を大幅に上回り、平年もかなり大きく上回った。</p>

<p>なす</p> 	<p>千両系は大阪産、高知産が主体となり、長茄子は福岡産と熊本産が主体となった。5月の気温が低かったことと、早い梅雨入りで6月上旬は降雨の日が多く、曇天続きだったことから、千両系の秋冬の産地は切り上がりが早く入荷が減少した。後続産地は出遅れから入荷量は伸び悩んだ。長茄子は終盤に向かいつつも順調な出荷を続け、旬を追うごとに増加した。なす全体では下旬に端境が生じたことにより、月間では前年をやや下回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は不足感から高値となり、旬を追うごとわずかに上昇傾向となった。月間では前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。</p>
<p>トマト</p> 	<p>愛知産を中心として、熊本産の準高冷地ものや石川産も主体となる入荷であった。愛知産の無加温トマトは作の終盤で旬を追うごとに減少する中で、梅雨に入り曇天続きから着色が進まず少ない入荷が続いた。月間では前年を大幅に下回った。後続の夏秋産地も梅雨入りが早く曇天続きから生育、着色とも進まず、入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年をわずかに下回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は品薄感と端境への警戒から旬を追うごとに上伸を続けたが、着色不良による品質低下品も見られて伸び悩んだ。月間では前年をかなりの程度下回り、平年をやや上回った。</p>
<p>ピーマン</p> 	<p>主力の宮崎産が中心となり、高知産や茨城産、大分産も主体となる入荷であった。立春物の宮崎産は作の終盤で中旬以降に減少した。高知産も旬を追うごとに減少したが、茨城産や大分産は順調だった。月間全体では前年、平年ともわずかに上回った。</p> <p>価格は端境への警戒から旬を追うごとに上伸し、前段産地の切り上がりと後続産地の単価高もあり、月間では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
<p>土物類</p> <p>さといも</p> 	<p>鹿児島産を中心とした入荷であった。離島ものが中旬以降の大雨の影響により収穫、出荷の作業ができず、2週間ほど入荷の無い日が続いた。特に下旬の入荷量が極端に少なく、月間でも少なかつた前年をかなり下回った。輸入の中国産の入荷もあったが、コスト高や世界情勢などが影響して国産との価格差がほとんどなく、前年の5%にも満たない入荷量に留まった。月間全体では少なかつた前年を大幅に下回り、平年を5割弱下回った。</p> <p>安い中国産の入荷がほとんどない中で、国産との価格差もなくなっていることから、価格は高値だった前年をかなり大きく上回り、平年を3割以上上回った。</p>
<p>ばれいしょ</p> 	<p>丸芋は長崎産が中心で、作の終盤でありながらも全旬を通じて潤沢な入荷が続いた。月間では前年を大きく上回った。メークインも長崎産が中心となり、作の終盤でありながらも潤沢な出荷となったが、作付けが減っているため入荷量自体は少なく、月間の入荷量は前年をかなり下回った。ばれいしょ全体では、月間の入荷量は前年、平年ともかなりの程度下回った。</p> <p>前月の単価高の影響により高値推移となったが、気温が高かったため厳しい販売状況が続いた。安値だった前年を3割以上上回り、平年をわずかに下回った。</p>
<p>たまねぎ</p> 	<p>主力の兵庫産が中心となり、大阪産や佐賀産の残量入荷もあった。兵庫産は平年並みの作柄で、中生種の即売物のお荷が中心となった。大玉傾向でL、2Lサイズが半々くらいの比率のため全旬を通じて入荷量は多く、月間でも前年を大きく上回った。輸入の中国産は国産との価格差がほとんどないことから入荷量が少なく、前年をかなり下回った。月間全体では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は大玉傾向と前年の極端な単価高の影響もあり、旬を追うごとに入荷が微増する中でも伸び悩んだ。梅雨の大雨の影響による品質低下品も見られたことから、月間では前年の半値以下となり、平年をかなり大きく下回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした8月の見通し

6月の初めに台風2号が停滞前線を刺激し、全国的に長雨に見舞われた。関東でも水田に近いハウスが水に漬かるなどの被害が発生した。斜面のかんしょなどの苗なども圃場によっては流亡し、秋の収穫に影響が出そうだとの声も聞かれた。

6月は西南暖地産や関東産地の平野物の切り上がり及早まる傾向で、後続の東北産地の露地作も前進気味と報告される。ここ10年、北海道と東北は5～6月は干ばつ傾向で、7月に豪雨に見舞われる展開が多かった。

6月下旬に東京市場の価格は高騰気味となったが、市場の仕入れ担当によると、消費の動きが良かったことによる高値ではなさそうだとの声が聞かれた。

8月は、果菜類を中心に作付けの減少は報告されるものの、前進気味で平年を上回る出荷が予想される。11月初め頃まで西日本の市場からの引き合いが強まると予想され、全国的に市場価格は堅調と予想される。

根菜類



だいこんは、北海道産（標茶）は道東産地から、例年と同様に7月上旬から始まると予想され、8月に入って出荷のピークを迎えると予想される。今年は干ばつはなく、Lサイズ中心に例年並みの出荷を予想している。同産（ようてい）の道央産地は6月29日から選果を開始した。6月は降雨が少なかったが、末頃にあった降雨により生育は順調でやや前進気味である。肥大はLサイズ中心だが2L寄りということで問題ない。10月上旬までほぼ計画通り出荷していくと予想される。青森産は8月に入って減り、7月の70%程度となると予想される。9月には再び増えて、秋のピークは10月と予想される。

にんじんは、北海道産（美幌）は7月20日から出荷開始予定であるが、前年より2日程度遅い。それでもほぼ平年並みであるが、干ばつ気味のため現状はやや細めに仕上がっている。6月末頃の降雨により、肥大は回復してくると

予想している。同産（斜里）は7月25日から始まり、10月いっぱいまでほぼ一定のペースで出荷されると予想される。作付けは前年並みで、中心サイズはM・Lと予想される。同産（新函館）の現状は出荷のピークで、7月20日頃まで続くと予想される。8月第1週で切り上がる予定だが、やや早まっている。少雨によりやや細めに仕上がっており、作付けは少なめでも、出荷は歩留まりが悪かった前年を上回ると予想している。



葉茎菜類

キャベツは、群馬産の現状は平年並みの出荷となっている。梅雨に入っても晴天が続き、作柄も良く作業も進んでいる。8玉サイズ中心で、最大のピークである8～9月も順調と予想している。岩手産は、梅雨入りして降雨も適度にあり、生育順調である。現状は出始めで、7月中旬に向けて増え、9月いっぱいまで一定ペースで出荷できると予想される。作付けは前年並みである。

はくさいは、長野産は標高1300メートル地帯の圃場からとなるが、7月中下旬から増え、8月がピークと予想される。6月初めの豪雨の影響により生育は不揃いであるが、7月には回復して、8月は平年並みと予想している。

ほうれんそうは、群馬産の雨よけ物は生育順調であり、8月も例年並みの出荷と予想している。栃木産の現状は平年並みの出荷であり、8月の盆前が当面のピークと予想している。標高800～1200メートル地帯の圃場であり、作付けは前年並みで8月の出荷も前年並みを予想している。岐阜産の出荷は8月に入って7月の80%程度と減ってくるが、9月下旬から再び増えてくると予想される。作付けは微減であり、現状は生育順調で、8月は平年並みと予想される。

ねぎは、北海道産の「軟白ねぎ」は7月初めから始まるが、出荷者が揃うのが8月の末頃であり、作付けは平年並みで、ピークは11月まで続くと予想される。青森産の現状はハウス物の出荷であり、露地物が始まるのは7月20日頃からで、当面のピークは8月の盆明けから9

月いっぱい予想される。その後、稲刈り作業が優先されるため一旦途切れ、10月後半に再びピークと予想される。作付けは前年並みである。

レタスは、長野産は空梅雨気味で多く出荷された前年より、現状は少なめとなっている。それでも平年並みで、6月下旬から7月の海の日明け頃がピークと予想される。現状の定植作業が順調であることから、8月も引き続きピークを維持できると予想している。群馬産は7月に入り少なめになっているが、上旬後半から中旬に向けて増えて、8月の盆過ぎまでほぼ一定のペースで出荷できると予想される。作柄は良好で、9～10月には再び増えると予想される。

果菜類



きゅうりは、福島産は8月に露地物が増え、施設物と約半々になると予想される。現状は露地物が始まったところであり、生育は順調である。ピークは7月下旬から8月であり、8月の出荷は例年並みを予想している。

なすは、栃木産の現状は平年並みに露地物の出荷が始まり、ピークは8月に入ってから盆頃までと予想される。全体の生育は順調であるが、天候の変動が激しいことによる農家の負担増から、作付けは微減である。

トマトは、北海道産（平取）の現状は、適度の降雨と晴天が続いているためトマトにとっての環境は良好であり、7月中旬から8月がピークと予想される。「桃太郎」はL、Mサイズ中心と予想される。同産（新小樽）の現状は、ミニトマトの出荷が順調に増えている。品種は「ミニキャロル」を中心に「アイコ」である。生育は順調で8月の盆前後がピークと予想される。その他に中玉トマトも出荷されると予想される。同産（留^{るもい}萌）のミニトマトの品種「キャロルセブン」は例年並みに6月下旬から始まった。生育は順調で盆前後にピークになると予想している。作付けは前年並みである。その後イエロー品種、中玉トマトの出荷がほぼ前年並みに始まると予想している。青森産（田子）の現状は出始めであり、ほぼ例年と同様のペースで、7月下旬から8月初め頃がピークと予想してい

る。中心品種の「りんか」はLサイズ中心の出荷と予想している。同産（つがるにしきた）の現状は生育順調で、8月中旬にピークとなり、Lサイズ中心の見込みである。福島産は7月中旬から始まり、8月中旬にピークと予想しており、例年並みの状況である。生産者の高齢化により作付けは前年の90%程度と減っている。桃太郎系品種が中心で、8月はLサイズ中心と予想される。

ピーマンは、岩手産の現状はハウス物の出荷で、主力の露地物は7月上旬からと予想される。露地物のピークは8月上旬で、作付けは増えており、施設物も含めると、8月の出荷は多雨の影響により少なかった前年を上回ると予想される。福島産の現状はハウス物とトンネル物の出荷で、露地物は7月10日頃から始まると予想される。全体の80%が露地物であり、8月中旬がピークと予想される。現状の生育は順調で、8月は前年をやや上回る出荷と予想している。

土物類



ばれいしょは、北海道産（今金）の「男爵」の早出し物は前年と同じく8月上旬から始まると予想される。例年、この時期は干ばつに遭いやすいが、今年は晴天が続くが適度に降雨もあり、生育は順調である。このまま推移すると豊作傾向とも予想され、早出し物のピークは9月上旬と予想される。同産（芽室）の「メイクイン」の早出し物は8月8日から出荷が始まり、生育は順調で豊作傾向と予想している。通常栽培物は9月1日からの出荷が予想される。その他の品種「マチルダ」「洞爺」のうち、前者は作付けが増えている。

たまねぎは、北海道産は7月から出荷が始まっているが、本格化するのは8月に入ってからであり、天候に恵まれて基本的には豊作傾向と予想している。L大サイズ中心と肥大も問題ない。佐賀産は7月までは農家で貯蔵しているものの出荷がメインとなり、その後は農協で貯蔵しているものがメインで、それも盆前までと予想される。10～20年前に比べると出荷はかなり少なくなっている。

その他



ブロッコリーは、北海道産の現状は干ばつにより全体的に遅れているが、灌水できる圃場は順調である。現在定植している物は9月に出荷不足となる可能性もある。7月10日過ぎからピークとなり、8月の出荷は平年並みを予想している。

セルリーは、長野産の現状は露地物に切り替わっており、10月中旬まで出荷が続くと予想される。作付けも前年並みで、8月の出荷も前年並みと予想される。

かぶは、青森産は干ばつの影響により肥大が遅いなど、作柄は前年より悪い。梅雨入りして降雨はあるが、7月もやや少なめの出荷と予想している。8月は今後の天候によるが、播種は順調で徐々にピークとなると予想される。

かぼちゃは、北海道産（きたはるか）は9月上旬から出荷が始まり、ピークは10月上旬からで、現状の生育は順調である。同産（新函館）は、7月24～25日から出荷が始まり、ピークは盆前で、品種は「みやこ」が70ヘクタール、加工向けの「えびす」も70ヘクタールで、生育順調である。

スイートコーンは、千葉産の出荷のピークは7月15日～8月5日と予想される。10日頃から減り始め、盆休みの前半で切り上がると予想される。作付けは微増で、天候の激変がなければ出荷は伸びると予想される。北海道産は、8月5日からほぼ例年並みに出荷が始まると予想している。ピークは盆前から20日頃までと予想され、作付けは前年の95%である。青森産は8月10日前後から出荷が始まり、ピークは9月初め頃と予想される。作付けは前年並みであり、品種は「恵味」が中心である。

えだまめは、山形産の「だだちゃ豆」の出荷は7月最終週からとなるが、生育は順調で例年よりやや早めである。ピークは8月中旬で、8月の第2週にはかなり少なくなってくると予想される。作付けは前年並みである。青森産の早生種は7月の第2週から始まり、7月下旬から8月上旬がピークと予想される。8月下旬には晩生の茶豆が始まり、9月がピークと予想して

いる。

にんにくは、青森産は6月末の段階でほぼ収穫は終わっており、全般に小振りの仕上がりで、出荷は平年並みかやや下回ると予想している。7月は加工向けの出荷が開始され、市場へは8月から半乾燥物のお荷となる。最大のピークは11～12月であるが、価格安の影響により作付面積は減少している。

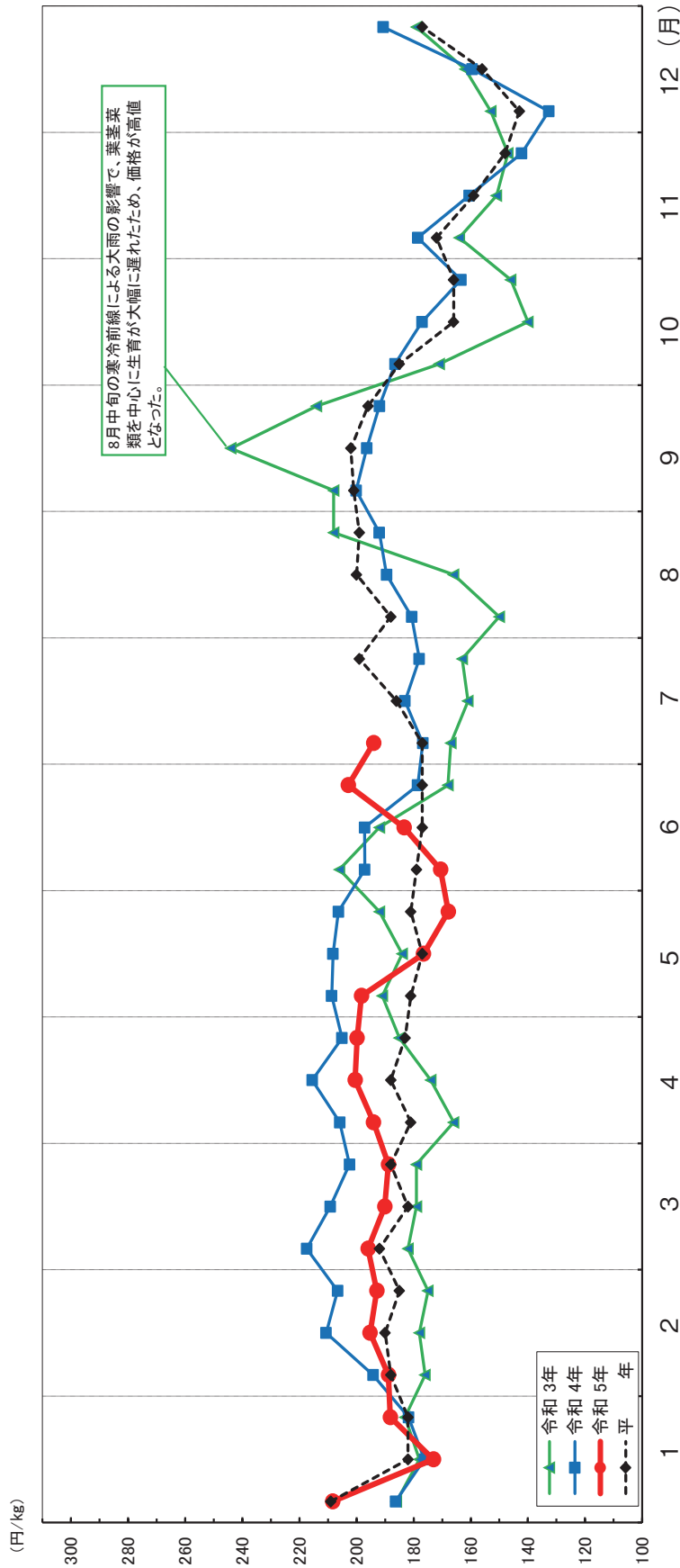
メロンは、北海道産は品種「ルピアレッド」は8月盆近くまでの出荷と予想され、「ティアラ」は7月5日から8月いっぱい、「らいでんクラウンメロン」は6月28日から10月いっぱい、「レッド01」は盆明けから10月上旬、「レッド113」は9月1日から11月上旬と予想される。作付けは180.2ヘクタールで、生産者の高齢化により規模縮小しているため、前年より11ヘクタール減少している。

すいかは、長野産のハウス物は6月から始まっており、露地物は7月3日から選果を開始した。ピークは7月の海の日のお週から8月の盆前までで、最終の選果は9月2週までを計画している。作付けは前年並みで、生育順調である。

（執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一）

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

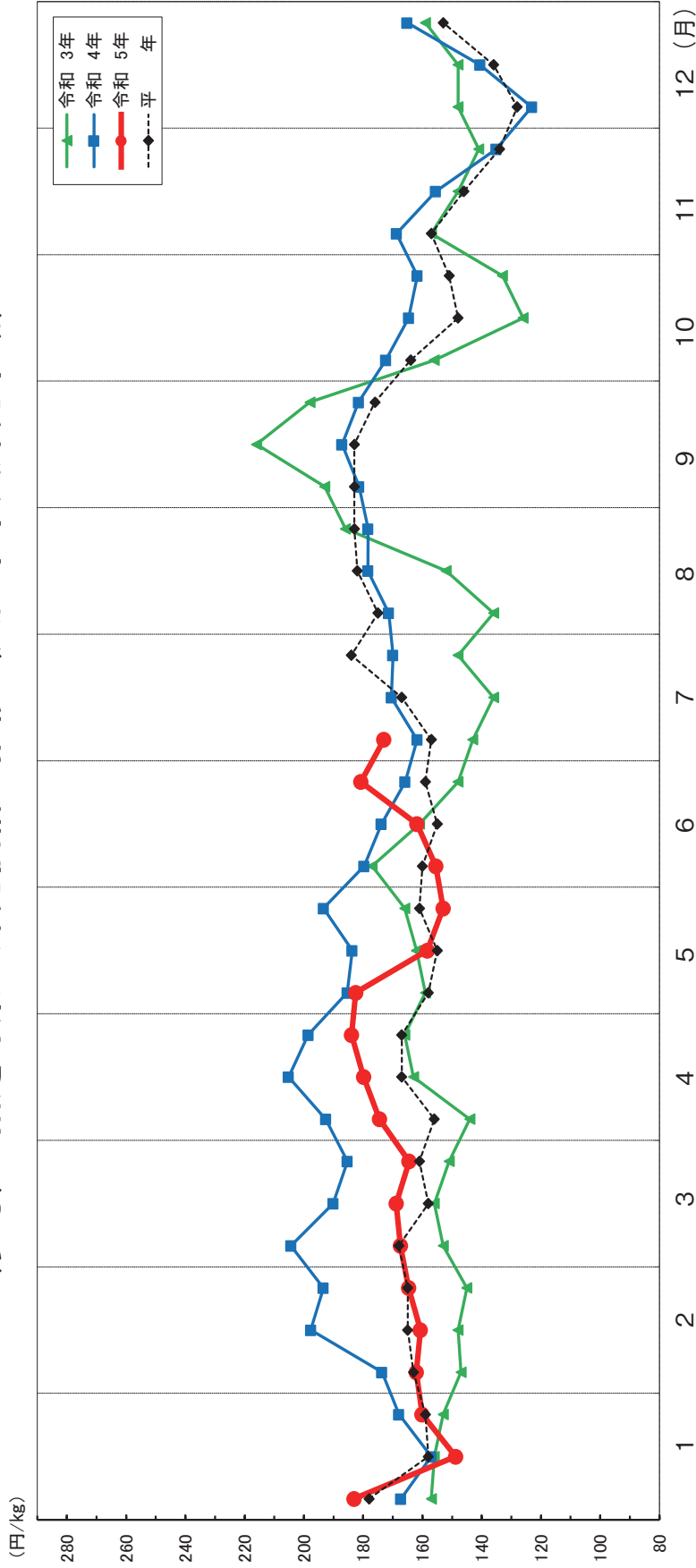
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月																	
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬																
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179			
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	200	196	187	177	163	179	161	142	133	160	191		
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194																					
平年	209	182	182	188	190	185	192	182	188	181	188	183	181	177	181	179	177	177	177	186	199	188	200	199	201	202	196	185	166	166	172	159	148	143	156	177				

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月												
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬											
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159		
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173																
平 年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。